

平成 24 年 2 月 15 日

男子体操競技情報 19 号 (訂正版)

(財) 日本体操協会
ロンドンオリンピック男子体操競技強化本部
審判委員会男子体操競技審判部

【目次】

1	はじめに	1
2	第 43 回世界体操競技選手権東京大会報告	2
3	第 65 回全日本体操競技団体・種目別選手権大会報告	8
4	2012 年度採点指針、FIG 通達	12
5	おわりに	24

2012 年 2 月上旬に FIG 男子技術委員会により新たな情報(Newsletter #26)が発表されたことを受け、男子体操競技情報 19 号の内容を一部変更し(変更部分赤字表示)、訂正版として通達します。

1 はじめに

ロンドンオリンピック男子選手強化本部
男子体操競技強化本部長 立花 泰則

「体操ニッポン」の心願である世界選手権大会での 33 年ぶり団体総合優勝を誓い、第 43 回世界体操競技選手権(東京)大会が 2011 年 10 月 7 日から開催されました。団体総合は、予選でトップ通過をしましたが、決勝では大過失を重ね無念の 2 位という結果になりました。1 位中国との得点差は 2.068、D スコアの差は 2.9 でありましたが、E スコアは 0.832 と実施を評価する面では中国を上回っていました。個人総合では、内村航平選手が他の選手を寄せ付けずに、世界の体操史上初となる三連覇を果たし、さらに、山室光史選手も個人総合 3 位となり表彰台に 2 名の日本人選手が登壇しました。種目別では内村選手がゆかで優勝、鉄棒 3 位、山室選手がつり輪で 3 位、沖口誠選手が跳馬で 3 位と金メダルを含む複数メダルを複数選手で獲得しました。これまで、日本は個人総合の強化を推し進めてきました。総合力を持ち合わせた選手達の武器となる得意種目が、世界の種目別選手達とメダル獲得を競い合う基盤が出来た証明であったと考えます。

今日まで「美しい体操」と「強い体操」を昇華させた「芸術的体操」を目指し練習を積み重ね、さらに、「心・技・体」全てにおいて充実させ、完成度と安定性の高い「体操ニッポン」の真骨頂となる演技を身につけるべく練習を行ってきました。引き続き練習過程において強い意志を持ち、これらをさらに向上させながら、どのような状況下でも演技の再現性を発揮できる準備を整えて、ロンドンの地へ向かう所存です。戦う相手は中国、米国などの諸外国だけではなく、自分達自身であると思います。

本情報 19 号では、主要大会の報告と共に、2012 年度の採点指針及び FIG 通達に記載されています。諸情報を共有し、ロンドンオリンピックでの団体総合優勝、個人総合優勝を含む表彰台に 2 選手、種目別では複数種目において、金メダルを含む複数メダルの獲得を目指し、「体操ニッポン」の心願成就に向け努力して行きましょう。

本情報が、全ての「体操ニッポン」の育成・強化・審判に携わる関係者、選手の皆さんと共に共有、活用され、日本の競技力の向上につながり、ロンドンオリンピックの舞台上「体操ニッポン」大願成就に向けての指針となる様にと考えます。皆様方のご協力をお願い申し上げます。

2 第43回世界体操競技選手権東京大会報告

審判委員会男子体操競技審判部

島田 利夫

倉島 貴司

- 大会期間：2011年10月7日～16日
- 場 所：東京体育館
- 日 程：10月 3日（月）男子D審判会議
女子ポディウムトレーニング（1日目）
10月 4日（火）男子審判会議と審判抽選
女子ポディウムトレーニング（2日目）
10月 5日（水）男子ポディウムトレーニング（1日目）
10月 6日（木）男子ポディウムトレーニング（2日目）
10月 7日（金）女子予選（1日目：1班～5班）
10月 8日（土）女子予選（2日目：6班～10班）
10月 9日（日）男子予選（1日目：1班～4班）
10月10日（月）男子予選（2日目：5班～8班）
10月11日（火）女子団体決勝
10月12日（水）男子団体決勝
10月13日（木）女子個人総合決勝
10月14日（金）男子個人総合決勝
10月15日（土）種目別決勝 男子：ゆ か、あん馬、つり輪
女子：跳 馬、段違い平行棒
10月16日（日）種目別決勝 男子：跳 馬、平行棒、鉄 棒
女子：平均台、ゆ か
- 参加国：77カ国（253名）
- D審判団（予選、団体決勝、個人総合、種目別と同一者が担当）
ゆ か D1：Andray FEDARAU(BLR) D2：Andrew TOMBS(GBR)
あん馬 D1：竹内輝明（日本） D2：Pablo CARRILES(ESP)
つり輪 D1：Alvaro SOUSA(POR) D2：Butch Andreja ZUNICH(USA)
跳 馬 D1：Alain MACCHIA(FRA) D2：Mohamed Smail HADJI(ALG)
平行棒 D1：Istvan BERCZI(HUN) D2：Mircera Dumitru APOLZAN(ROU)
鉄 棒 D1：Vincent REIMERING(NED) D2：Joerg FETZER(GER)
- Reference Judges
Josef TOTH(AUT) Nikolaos PROVIAS(GRE) Diego LAZZARICH(ITA)
Alejandro SAGRERAS(ARG) Johny BERNARD(LUX) Andreas KUONI(SUI)
Bjorn Magnus THOMASSON(ISL) Stefan Van BAELEN(BEL)
Vilem KOCIAN(CZE) Colm MURRAY(IRL) Bronislavs KONSTANTINOVICH(LAT)
Robert LIEFELDT(RSA)

□ E 審判会議内容と審判抽選結果

● 抽選結果

予 選 平行棒 E5 : 島田利夫

決 勝 決勝出場国は抽選対象外 (団体決勝、個人総合、種目別決勝)

● 全体を通して (Adrian STOICA : ROU)

両把手を挟んだ馬背ロシアン 360° 転向がユニバーシアード深圳大会で行われたが、これはトンフェイを連続した発展技ととらえずに、あくまでも両把手を挟んだロシアン転向技として C 難度と判定した。MTC として今回の世界選手権でも同様に判定する。

● 採点制度

前大会同様 Reference Judge (RJ) 制度を導入する。

E 審判は 5 人、決定点は上下カットの 3 人の平均。

この EJ-Score と RJ の平均 (RJ-Score) に一定の差が生じた場合、EJ-Score と RJ-Score の平均 (Delta-Score) が Final Score となる。例外として 2 名の RJ の得点に一定以上の差が生じた場合はこの限りではない。EJ-Score が Final Score となる。

□ 申請された新技と新たな追加情報

● ゆ か

・ 後ろとびひねり前方伸身 2 回宙返りひねり : F 難度 (IV)

● つり輪

・ 前方屈身または伸身宙返り 5/2 ひねり下り : D 難度 (V)

● 跳 馬

・ 前転とび前方伸身宙返り 3 回ひねり : 7.4

● 平行棒

・ 前方開脚 5/4 宙返り懸垂 : E 難度 (I)

一つの演技に同じ技のバリエーションは入れられない (前方開脚 5/4 宙返りは一つだけ)。二つ目からは出現順に繰り返すとみなされる。支持、腕支持、懸垂のすべてが対象になる。

・ 倒立から伸膝で振り下ろし懸垂前振り上がり開脚抜き屈腕支持 (バブサー屈腕支持) (バブサー腕支持と同一枠、同価値) : C 難度 (III)

・ 懸垂前振り上がり (開脚抜き) ひねり腕支持 : B 難度 (III)

・ 前振り上がり後方かかえ込み 5/4 宙返りひねり腕支持 : D 難度 (II)

・ 前振りとび 3/4 ひねり (軸手と反対側の) 単棒横向き倒立 (Dimic) : D 難度 (I)

・ 前振り片腕支持 5/4 ひねり単棒倒立経過軸手を換えて片腕支持 5/4 ひねり支持 : F 難度 (I)

・ 前方屈身 2 回宙返り下り : F 難度 (V)

● 鉄 棒

・ ヤマワキひねり片大逆手懸垂~後ろ振り上がり倒立 : E 難度 (II)

・ 前方浮腰回転振り出しとび倒立 1 回ひねり大逆手 : D 難度 (IV-10) + C 難度 (I-15) (分割)

・ 大逆手エンドー 1 回ひねり逆手倒立 (片逆手倒立と同一枠、同価値) : D 難度 (IV)

・ 大逆手後ろ振りゲイロード (ゲイロードと同一枠、同価値) : D 難度 (II)

□ 団体予選の結果

1 位	日本	364.291
2 位	アメリカ	361.583
3 位	中国	359.126
4 位	ドイツ	354.132
5 位	ロシア	353.725
6 位	韓国	351.331
7 位	ルーマニア	350.900
8 位	ウクライナ	350.434
(以上が五輪団体出場権獲得)		
9 位	フランス	349.818
10 位	イギリス	348.742
11 位	スペイン	348.725
12 位	カナダ	347.076
13 位	ブラジル	346.626
14 位	プエルトリコ	344.460
15 位	イタリア	343.642
16 位	ベラルーシ	342.575

(以上が五輪テストイベントに出場し、残り 4 枠を競う)

□ 団体決勝の結果

		ゆ か	あん馬	つり輪	跳 馬	平行棒	鉄 棒	
1 位	中国	45.566	43.999	44.732	48.199	45.432	47.233	275.161
2 位	日本	45.265	43.523	45.299	48.700	46.199	44.107	273.093
3 位	アメリカ	46.032	43.857	43.565	47.765	45.599	46.265	273.083
4 位	ロシア	44.366	41.966	44.999	48.357	44.491	44.866	269.045
5 位	ウクライナ	43.857	42.565	43.966	46.882	42.266	44.566	264.102
6 位	ドイツ	44.399	40.465	43.399	46.699	43.199	45.765	263.926
7 位	韓国	41.932	41.966	42.465	48.333	43.332	42.365	260.393
8 位	ルーマニア	42.132	42.940	42.465	31.432	43.665	42.541	245.175

□ 団体決勝 中国・日本・アメリカの得点 Best-3 比較

	ゆ か	あん馬	つり輪	跳 馬	平行棒	鉄 棒	合 計
日本	45.265	43.523	45.299	48.700	46.199	44.107	273.093
中国	45.566	43.999	44.732	48.199	45.432	47.233	275.161
差 (対日本)	+0.301	+0.476	-0.567	+0.501	-0.767	+3.126	+2.068
アメリカ	46.032	43.857	43.565	47.765	45.599	46.265	273.083
差 (対日本)	+0.767	+0.334	-1.734	-0.935	-0.600	+2.158	-0.01

□ 団体決勝の D スコア (3名の合計) 比較

	ゆ か	あん馬	つり輪	跳 馬	平行棒	鉄 棒	合 計	順
中国	19.6	18.1	20.0	20.6	19.6	21.9	119.8	①
日本	19.2	18.3	19.6	20.6	19.5	19.7	116.9	③
アメリカ	19.8	18.3	19.0	21.0	19.0	20.2	117.3	②
ロシア	19.2	16.9	19.3	21.0	18.6	19.1	114.1	④
ウクライナ	18.6	17.4	18.6	20.2	18.0	19.6	112.4	⑥
ドイツ	18.7	16.6	19.1	19.4	19.2	21.1	114.1	④
韓国	18.0	18.2	18.6	20.2	17.8	18.9	111.7	⑦
ルーマニア	18.9	17.9	17.3	13.6	18.5	17.7	103.9	⑧

□ 個人総合入賞者の D-Score と得点

順	選手名	ゆ か	あん馬	つり輪	跳 馬	平行棒	鉄 棒	合 計
1位	内村 航平 (日本)	15.566 6.5	15.400 6.3	15.166 6.5	16.233 6.6	15.566 6.5	15.700 6.7	93.631 39.1
2位	BOY Philip (GER)	14.866 6.4	14.466 5.9	14.500 6.0	16.066 6.6	14.566 6.3	16.066 7.4	90.530 38.6
3位	山室 光史 (日本)	14.566 6.1	14.666 5.7	15.125 6.7	16.066 7.0	14.966 6.2	14.866 6.2	90.255 37.9
4位	PURVIS Daniel (GBR)	15.033 6.4	14.566 6.0	14.333 6.1	16.000 6.6	15.200 6.4	14.800 6.1	89.932 37.6
5位	OROZCO John (USA)	14.400 5.7	14.366 6.4	14.300 6.1	15.866 6.6	15.366 6.4	15.366 6.4	89.664 37.6
6位	BELYAVSKIY D. (RUS)	14.733 6.1	14.733 6.0	14.375 5.6	16.233 7.0	14.600 6.3	14.600 5.8	89.274 36.8
7位	KUKSENKOV M. (UKR)	14.366 6.1	15.000 6.2	14.500 6.2	16.033 6.6	14.033 6.3	15.200 6.9	89.132 38.3
8位	NGUYEN Marcel (GER)	15.233 6.6	13.866 5.4	14.930 6.4	15.133 6.6	15.200 6.7	14.466 6.5	88.831 38.2

□ 種目別決勝の上位 3 選手の演技構成

● ゆ か

・1位 内村航平(日本) 15.633 D : 6.7 E : 8.933

後方かかえ込み 2 回宙返り 3 回ひねり (リ・ジョンソン) (G)、前方宙返り 1 回ひねり～前方宙返り 2 回ひねり (C+D)、後方宙返り 3/2 ひねり～バンローン (C+D)、後方宙返り 5/2 ひねり～前方宙返り 3/2 ひねり (D+C)、フェドルチェンコ (C)、トーマス (D)、後方伸身宙返り 3 回ひねり (D)

・2位 ZOU Kai(CHN) 15.500 D : 6.9 E : 8.600

後方伸身 2 回宙返り 2 回ひねり (F)、後方宙返り 3/2 ひねり～バンローン (C+D)、前方宙返り 2 回ひねり～前方宙返り 1 回ひねり (D+C)、後方宙返り 5/2 ひねり～前方宙返り 3/2 ひねり (D+C)、フェドルチェンコ (C)、テンポ宙返り～伸身トーマス (B+E)、後方かかえ

込み 2 回宙返り 2 回ひねり (E)

・ 3 位 **HYPOLITO Diego(BRA) 15.466 D : 6.8 E : 8.666**

テンポ宙返り～後ろとびひねり前方屈身 2 回宙返り (B+E)、後方宙返り 3/2 ひねり～前方宙返り 5/2 ひねり (C+E)、後方宙返り 5/2 ひねり～前方宙返り 2 回ひねり (D+D)、十字倒立 (C)、トーマス (D)、伸身トーマス (E)、後方伸身宙返り 3 回ひねり (D)

・ 3 位 **SHATILOV Alexander(ISR) 15.466 D : 6.7 E : 8.766**

後方伸身宙返り 2 回ひねり屈身宙返り (コリバノフ) (F)、後方宙返り 3/2 ひねり～バンローン (C+D)、前方宙返り 2 回ひねり～前方宙返り 3/2 ひねり (D+C)、フェドルチェンコ (C)、後方宙返り 5/2 ひねり～前方宙返り 1 回ひねり (D+C)、テンポ宙返り～トーマス (B+D)、後方かかえ込み 2 回宙返り 1 回ひねり (D)

● あん馬

・ 1 位 **BERKI Krisztian(HUN) 15.833 D : 6.7 E : 9.133**

正交差 1/4 ひねり一把握上倒立振り下ろして開脚逆入れ支持 (D)、E フロップ (E)、E コンバイン (E)、後ろ移動 2/3 (B)、ロシアン 1080° (D)、縦向きシュピンドル (D)、前移動 3/3 (D)、シバド (D)、ウ・グォニアン (E)、dsA 倒立 3 部分移動 1 回ひねり下り (E)

・ 2 位 **TOMMASONE Cyril(FRA) 15.233 D : 6.5 E : 8.766**

正交差 1/4 ひねり一把握上倒立振り下ろして開脚逆入れ支持 (D)、逆交差 1/4 ひねり一把握上倒立振り下ろして開脚逆入れ支持 (D)、横向き旋回 (A)、D コンバイン (D)、E フロップ (E)、ウ・グォニアン (E)、ロシアン 1080° (D)、前移動 3/3 (D)、シバド (D)、dsA 倒立 3 部分移動 1 回ひねり下り (E)

・ 3 位 **SMITH Louis(GBR) 15.066 D : 7.0 E : 8.066**

逆交差 1/4 ひねり一把握上倒立振り下ろして開脚逆入れ支持 (D)、正交差 1/4 ひねり一把握上倒立振り下ろして開脚逆入れ支持 (D)、E フロップ (E)、F コンバイン (F)、縦向きシュピンドル (D)、ウ・グォニアン (E)、ロシアン 1080° (D)、前移動 3/3 (D)、シバド (D)、縦向き旋回、dsA 倒立 3 部分 移動 1 回ひねり下り (E)

● つり輪

・ 1 位 **CHEN Yibing (CHN) 15.800 D : 6.8 E : 9.000**

アザリアン (D)、伸腕伸身中水平支持 (E)、伸腕伸身力十字倒立 (E)、ジョナサン (D) 後ろ振り上がり水平支持 (D)、ホンマ十字懸垂 (D)、伸腕伸身力十字倒立 (E)、後ろ振り上がり中水平支持 (E)、後ろ振り上がり倒立 (C)、後方車輪倒立経過、後方伸身 2 回宙返り 1 回ひねり下り (D)

・ 2 位 **NABARRETE Zaneti Arthur(BRA) 15.600 D : 6.5 E : 9.100**

後方伸腕伸身逆上がり中水平支持 (F)、ゆっくり背面水平懸垂経過中水平支持 (E)、後ろ振り上がり水平支持 (D)、アザリアン (D)、ほん転倒立 (C)、ジョナサン (D)、後ろ振り上がり開脚水平支持 (C)、ナカヤマ (D)、後ろ振り上がり倒立 (C)、後方伸身 2 回宙返り 1 回ひねり下り (D)

・ 3 位 **山室光史(JPN) 15.500 D : 6.7 E : 8.800**

後方伸腕伸身逆上がり中水平支持 (F)、ナカヤマ (D)、伸腕伸身力十字倒立 (E)、後ろ振り上がり十字倒立 (D)、後ろ振り上がり倒立 (C)、ジョナサン (D)、後ろ振り上がり中水平支持 (E)、アザリアン (D)、ほん転倒立 (C)、後方伸身 2 回宙返り 1 回ひねり下り (D)

● 跳馬

・1位 **YAN Hak Seon(KOR) 16.566**

- ① 前転とび前方伸身宙返り 3 回ひねり・16.866 D : 7.4 E : 9.466
 ② ロペス・・・・・・・・・・・・・・・・ 16.266 D : 7.0 E : 9.366 (Line -0.10)

・2位 **GOLOTSUKOV Anton(RUS) 16.366**

- ① ル・ユーフ・・・・・・・・・・・・・・・・ 16.333 D : 7.0 E : 9.333
 ② ジーマーメン・・・・・・・・・・・・ 16.400 D : 7.0 E : 9.400

・3位 **沖口 誠 (JPN) 16.291**

- ① ロペス・・・・・・・・・・・・・・・・ 16.300 D : 7.0 E : 9.400 (Line -0.10)
 ② ヨー2・・・・・・・・・・・・・・・・ 16.283 D : 7.0 E : 9.283

● 平行棒

・1位 **LEYVA Danell(USA) 15.633 D : 6.4 E : 9.233**

前振り上がり開脚抜き倒立 (B)、棒下宙返り片腕支持 1 回ひねり倒立 (テンハイビン) (F)、棒下宙返り 3/4 ひねり倒立 (E)、棒下宙返り倒立 (D)、後方車輪片腕支持 (5/4+1/4) ひねり倒立 (E)、後方車輪片腕支持 1 回ひねり倒立 (D)、後方車輪 (C)、前振り片腕支持 1 回ひねり倒立 (C)、前振りひねり倒立 (C)、後方屈身 2 回宙返り下り (D)

・2位 **TSOLAKIDIS Vasileios(GRE) 15.533 D : 6.5 E : 9.033**

け上がり開脚抜き倒立 (B)、前振り上がり片腕支持 5/4 ひねり単棒横向き倒立経過、1/4 ひねり倒立 (ソラキディス 2) (F)、棒下宙返り倒立 (D)、前振り上がり片腕支持 1 回ひねり倒立 (E)、前振り上がり片腕支持 3/4 ひねり単棒横向き倒立経過、片腕支持 3/4 ひねり支持 (ソラキディス 1) (E)、ヒーリー (D)、屈身ルンプティス (E)、後ろ振り上がり開脚入れ伸腕支持 (B)、前振り片腕支持 1 回ひねり倒立 (C)、後方屈身 2 回宙返り下り (D)

・2位 **ZHANG Chenglong(CHN) 15.533 D : 6.5 E : 9.033**

棒下振り出し腕支持、後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持 (D)、棒下宙返り 3/4 ひねり倒立 (E)、棒下宙返り倒立 (D)、棒下宙返りひねり倒立 (E)、後方車輪片腕支持 1 回ひねり倒立 (D)、後方車輪 (C)、前振り片腕支持 1 回ひねり倒立 (C)、前方開脚 5/4 宙返り腕支持 (D)、ヒーリー (D)、後方屈身 2 回宙返り下り (D)

● 鉄棒

・1位 **ZOU Kai(CHN) 16.441 D : 7.7 E : 8.741**

アドラーひねり～伸身トカチェフ (D+D)、リバルコ～ポゴレロフ (D+E)、シュタルダーとび 3/2 ひねり大逆手 (E)、アドラー1 回ひねり逆手倒立～ヤマワキ (E+D)、エンドー1 回ひねり大逆手～大逆手後ろ振り伸身イエーガー (D+D)、後方伸身 2 回宙返り 2 回ひねり下り (E)

・2位 **ZHANG Chenglong(CHN) 16.366 D : 7.6 E : 8.766**

伸身トカチェフ～リバルコ (D+D)、アドラー1 回ひねり逆手倒立～ヤマワキ (E+D)、シュタルダーとび 3/2 ひねり大逆手 (E)、アドラーひねり～開脚モズニク (D+D)、エンドー1 回ひねり大逆手～大逆手後ろ振り伸身イエーガー (D+D)、エンドー、後方伸身 2 回宙返り 2 回ひねり下り (E)

・3位 **内村航平(JPN) 16.333 D : 7.3 E : 9.033**

カッシーナ (G)、シュタルダーとび 3/2 ひねり片大逆手 (D)、アドラーひねり～伸身トカチ

ェフ (D+D)、後方車輪とび 3/2 ひねり片大逆手 (C)、アドラー1 回ひねり片逆手倒立～ヤマワキ (D+D)、エンドー、コールマン (F)、後方とび車輪 1 回ひねり (C)、後方伸身 2 回宙返り 2 回ひねり下り (E)

□ 所感

ロンドン五輪の前哨戦ともなる大会であったが、やはり日本対中国に焦点が集まった。ポディウムトレーニングから両国の練習に注目が注がれる中、日本は内村、田中佑典を中心に好調さをアピールし、対する中国は Teng Haibin、Zhang Chenglong、復帰した Zou Kai を中心に全種目に抜きこんでた強さを見せつけた。

団体予選では日本は 1 日目の 1 班に登場し、美しい体操が評価され、各種目とも高い E スコアを獲得し 1 位で通過をした。対する中国は 2 日目最終班で演技を行ったがミスに加え、つり輪、鉄棒の E スコアが伸びず、最終的には好調なアメリカにも届かず 3 位で予選を終わった。2 位通過のアメリカは非常に力強いダイナミックな演技と安定性を十分に見せつけ、実力をアピールする形となった。

団体決勝では日本は 3 回の落下があり、結果 2 位に終わった。アクシデントやケガを背負いながら迎えた決勝ではあるが、そこに優勝を狙うチームとしての強さと勢いが見られなかったのは残念であった。その原因を日本としてもう一度よく分析して対策を考えることが必要であろう。1 位となった中国においても大過失が数か所あったが、最後まで日本と競った 3 位のアメリカはミスがほとんどなく日本との差はわずか 0.01 であった。

採点の傾向としては、予選においては各種目とも実施の良し悪しがクリアに反映された E スコアが表示されていた。審判編成が異なることもあるが、決勝では E スコアの基準が変わる種目もあった。特に鉄棒において減点基準のあいまいさが目立った。

個人総合では内村選手が他の選手を寄せ付けず貫禄の優勝を果たした。また、山室選手もミスなく安定した演技で 3 位に入り、2 人の活躍は会場を大いに盛り上げてくれた。世界にも大いにアピールできたと感じる。

種目別では、平行棒まで優勝者がすべて異なる国というデッドヒートを繰り広げ、各国のスペシャリストのすばらしい演技が披露された。ゆか優勝の内村選手、跳馬優勝の Yan Hak Seon 選手、平行棒優勝の Leyva Danell 選手らはオリジナリティあふれる演技で会場を魅了していた。鉄棒は D スコアの高い中国選手 2 人が 1 位 2 位を占めた。両選手とも D スコアを 7.7、7.6 という非常に高めた演技を構築していた。前回の世界選手権ロッテルダム大会での種目別メダルは内村選手のゆか 2 位・平行棒 3 位の 2 個であったが、今回は内村選手のゆか 1 位・鉄棒 3 位、山室選手のつり輪 3 位、沖口選手の跳馬 3 位の 4 個となった。

オリンピック・ロンドン大会まで残り少ない日々となるが、今大会の反省、経験を十分分析して選手、コーチ、関係者のさらなるがんばり、研鑽を期待したい。

3 第 65 回全日本体操競技団体・種目別選手権大会報告

● ゆか (荒木慎一、武田庄治)

・ 内規加点対象者

予選 : 5 名 (6.5→6.6 : 2 名、6.6→6.7 : 1 名、6.7→6.9 : 2 名)

団体 : 5 名 (6.5→6.6 : 2 名、6.6→6.7 : 3 名)

種目別：4名（6.5→6.6：1名、6.7→6.9：2名、7.0→7.2：1名）

・ 種目別上位者

1位：内村航平 16.200 D:7.2 E:9.000

2位：白井健三 15.650 D:6.9 E:8.750

3位：佐藤 巧 15.300 D:6.6 E:8.700

・ 演技実施について

Eスコアの加点対象者は3日間で6名（予選2名、団体決勝3名、種目別決勝1名）であったが全体的に着地を止めようとする意識は感じられた。宙返り技においては高さ不足・ひねり不足・姿勢不良・軸ぶれ・不明確な姿勢・技術不良に伴う不安定な着地が主な減点の対象となった。特に後方伸身宙返り3回ひねりにおけるひねり不足が目立った。また低い着地姿勢、明確な着地姿勢を示さず次の動きに移行する捌き、ロンダートで斜め向きの着地体勢から宙返り技へ移行する実施は、相応の減点とした。宙返り転の技は実施頻度が増えているが、余裕のない捌きや着手後にバウンドしてスムーズな直立姿勢を示さない実施が多くみられ、軸ぶれのある歪んだ実施は大きな減点となった。そのため、ほとんどの選手が減点の対象であった。静止技については、脚上挙支持～伸腕屈身力倒立における脚上挙支持の静止時間不足や十字倒立での姿勢不良が主な減点対象であった。

● あん馬（高橋孝徳、田沼寛文）

・ 内規加点対象者

予選：12名（6.3→6.4：10名、6.5→6.7：2名）

団体：4名（6.3→6.4：4名、6.5→6.7：0名）

種目別：6名（6.3→6.4：2名、6.5→6.7：4名）

・ 種目別上位者

1位 内村航平 15.700 D:6.7 E:9.000

2位 小林研也 15.200 D:6.7 E:8.500

3位 外村和才 15.050 D:6.4 E:8.650

・ 演技実施について

昨年度よりDスコアを高めた演技が増えた。一方、一つひとつの技の実施が曖昧になってきており、細かい減点や大過失が多かった。

種目別予選26演技中Eスコアの平均は7.83と8点台を割っている。落下は予選で8回あり、4選手に1回以上割合で落下となった。また、中断しない演技でありながら馬体への接触（タッチ）やぶつかりなどが多く、結果として大きな減点になってしまう実施も多かった。種目別決勝では出場者の予選Eスコア平均が8.49であったのに対し、決勝で8.09と低下し、落下は4回を数えた。

全体を通して倒立位を経過する交差技を実施する選手が多くなってきた（38/70演技）。スムーズな捌きで実施している選手も増えてきたが、逆交差で倒立位を経過する技については、力を使用した捌きや腰をまげる実施が多かった。また、倒立位を経過する技やとび交差技の終末局面で瞬時の停滞や両脚で馬体を抑えるような実施が目立った。明らかに臀部が馬体に乗るような場合は器械上への落下として判定した。馬端からあん部へ移動するとび交差技では明確なとび局面を示さない実施が多かった。

ウ・グォニアンやロシアン1080°等については、転向の後半でスピードが遅くなる実施、足先が馬体よりも下がる実施、足開きが減点の対象になった。

縦向き移動技では、移動中の角度を意識した実施が徐々に増えてきている。その反面、移動後に明確な縦向き支持を示さない捌きが目立った（縦向き旋回での向きの減点）。

団体・種目別選手権という競技会特性のため団体決勝ではDスコアを抑え実施の安定性を目指した演技が多かったのに対し、種目別競技では明らかに無謀と思われる演技構成やスピードはあるが安定性を欠いた旋回での実施がみられた。

● つり輪（島田利夫、細川浩孝）

・ 内規加点対象者

予 選：9名（6.4→6.5：7名、6.6→6.7：1名、6.7→6.9：1名）

団 体：5名（6.4→6.5：3名、6.6→6.7：1名、6.7→6.9：1名）

種目別：7名（6.4→6.5：6名、6.7→6.9：1名）

・ 種目別上位者

1位 山室光史 15.850 D:6.9 E:8.950

2位 小林研也 15.200 D:6.5 E:8.700

3位 岡村康宏 15.150 D:6.9 E:8.250

・ 実施について

全体のEスコアの平均は7.985（67名）であり、予選7.693（23名）、団体決勝8.125（36名）、種目別決勝8.193（8名）であった。最高は8.95であり、平均値とも昨年度より低下した。

中水平支持では、水平支持と判定されるような曖昧な姿勢（身体が斜めになり肩が輪より高い、全体の水平位置が高い等）については姿勢不良の減点とした。また、水平支持や開脚水平支持においても、身体が水平でない、腰がまがり下半身や足先が下がるような姿勢についてもそれぞれ小・中欠点とした。

十字倒立においては、深過ぎる握り（中には、肘がまがるような深い握り）、頭の位置が高い（輪より高い）反った姿勢、輪の揺れ等により複数の減点を受け、大きな減点となるケースも少なくなかった。

ヤマワキやグチョギーにおいて、高さに欠ける、懸垂前に身体の開きがない実施については相応の減点とした。

前方および後方車輪倒立では、ほとんどの選手がケーブルの揺れや肘のまがり、姿勢不良等の減点を受けていた。また、倒立姿勢において美しいと思える実施が少なかった。

終末技の着地について加点した選手は3日間で11名であった。着地をねらって止めようとする意識は多くの選手に感じられたが、着地前に身体を開くような余裕のある捌きはまだ少なかった。

全体を通して、ほとんどの力静止技に対して姿勢不良や静止時間不足、深過ぎる握り等の減点をせざるを得ない状況が多くまだまだ力不足という印象を強く受けた。しかし、少数ではあるが十字懸垂や中水平支持等でしっかりと手首を伸ばし美しい姿勢を示したり、長い静止時間により力強さを表現する実施も見られるようになってきた。

● 跳馬（倉島貴司、山下厚順）

・ 内規加点対象者

予 選：12演技 内訳：ドラグレスク=2名、ロペス=5名 ヨーII=3名
ローチェ=1名

着地：1名（前転とび前方伸身宙返り2回ひねり）

団体：8名 内訳：ドラグレスク=2名、ロペス=4名 ヨーII=1名
ローチェ=1名

種目別：8演技 内訳：ドラグレスク=1名、ロペス=4名 ヨーII=2名、
ローチェ=1名

・種目別上位者

1位 小倉佳祐 16.425

1：ヨー2…………… 16.450 D:7.2 E:9.250

2：ロペス……………16.400 D:7.2 E:9.200

2位 山室光史 16.275

1：ロペス……………16.550 D:7.2 E:9.350

2：前転とび前方伸身宙返り2回ひねり…16.000 D:6.6 E:9.400

3位 齊藤優佑 16.175

1：ヨー2…………… 16.550 D:7.2 E:9.350

2：ドリッグス …………… 15.800 D:6.6 E:9.300 ライン -0.10

・演技実施について

第1局面では、グループIVにおける足開き（中欠点）は減少傾向ではあるが、約半数が減点対象となった。グループIII（特にロウ・ユン）で肘をまげる着手が多く見られ、姿勢+高さの減点になっていた。

第2局面では、第1局面での姿勢不良（着手した際の軸ぶれや左右への偏り）により、跳馬の延長線上から外れ、ライン減点を含め複数の減点の原因となっていた。雄大さ（高さ、距離）を表現する実施が少なく、大半が中欠点と判断された。ローチェやドラグレスクにおける足の開き、ロペスにおけるひねり不足も多く見受けられた。

着地については、着地の準備が不十分のため着地姿勢が低くなる実施も多く見受けられ、中欠点以上の減点が多かった。着地加点対象者は予選1名だけであった。

● 平行棒（森 直樹、河相公一）

・内規加点対象者

予選：6名（6.5→6.6：5名、6.8→7.0：1名）

団体：5名（6.5→6.6：4名、6.8→7.0：1名）

決勝：6名（6.5→6.6：3名、6.7→6.9：1名、6.8→7.0：2名）

・種目別上位者

1位 田中和仁 15.600 D:7.0、E:8.600

2位 桑原 俊 15.500 D:6.6 E:8.900

3位 小林研也 15.450 D:6.9 E:8.550

・演技実施について

終末姿勢が倒立である技における角度の逸脱や倒立での手の握り換え、ずらしが随所にみられる演技が多かった。また、一つの技において角度の逸脱による減点+手ずらしによる減点を被る実施も多く見られた。これは、倒立ひねりなどのような平易な技においても同じことが言える。また、「後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持」を実施する選手が増えてきた（66演技中36演技）が、その後の「後ろ振り倒立（2秒orひねり）」においての腰まがりや力を使った捌きが多く見られた。宙返りから腕支持になる技においては、高さや回転不足によってバーにぶ

つかる実施が多くみられ、減点の無い演技は少なかった。終末技においては、全選手が後方屈身2回宙返り下りを実施し、着地が止まった選手は全体の25%であった。種目別決勝では予選よりもDスコアを高めて臨んできた選手が増え、ハイレベルな戦いとなった。

● **鉄 棒** (千葉一正、高岡 治)

・ 内規加対象者

予 選 : 3 名 (7.0→7.1 : 3 名)

団 体 : 3 名 (7.0→7.1 : 3 名)

種目別 : 4 名 (7.0→7.1 : 2 名、7.3→7.5 : 1 名、7.5→7.7 : 1 名)

・ 種目別上位者

1 位 内村航平 16.750 D:7.7 E:9.050

2 位 田中佑典 16.250 D:7.5 E:8.750

3 位 石川大貴 15.650 D:6.7 E:8.950

・ 演技実施について

競技会全体を通して減点が多い項目は、アドラーひねりやアドラー1回ひねりの角度の逸脱、ひねり技での角度の逸脱、コバチやコールマンでの高さ不足とバーを握る際の姿勢不良、ヤマワキの不明瞭な姿勢、車輪での手のずらし、終末技での高さ不足や姿勢不良と着地減点などであった。また、終末技あるいはコバチやコールマンに至る後方車輪での膝のまがりも気になるところである。着地加点は、種目別予選で3名、団体決勝5名、種目別決勝で1名であった。

石川大貴選手(順天堂大学)のリバルコは高い位置で握りが入った良いさばきであった。また、内村航平選手(KONAMI)は、Dスコアを上げて美しい体操を目指したすばらしい実施であった。特に、終末技は三日間とも着地加点が与えられる実施であり、単に着地が止まるだけでなく、余裕を持って止めていた。

4 2012年度採点指針、FIG 通達 (Newsletter26 情報を追加、変更)

□ 2012年度採点指針 (各種目の採点の方向性、難度認定と演技実施上の確認事項)

● 全体として

- 積極的にDスコアを高めた演技を評価する。
- 演技に安定感があり、指先や足先、肩の線や体線にまで美しさを感じる演技を評価する。
- 雄大な終末技と安定した着地を評価する。

● 一般条項

1. 終末技やゆかの宙返りの着地で両足着地と同時に尻もちを着いた場合、中欠点+大欠点となる。
2. 終末技で着地姿勢が低い、または余裕のない着地は減点となる (-0.10、-0.30)。
3. 採点規則 p26 第 24 条、倒立でぐらつく減点には小欠点もある。
4. ライン減点：片足が直接線外へ出て着地した後、もう一方の足(身体の他の部分)がさらに線外へ出た場合は、身体の二カ所が出たことに対して 0.3 の減点となる。ライン減点は、ゆかと跳馬で同じように適用する。
5. 本情報内で「同一棒(同一番号)であるが別技と判断する」、と記載された技は両技とも演技

内で実施することができる。例えば、開脚モズニクと伸身モズニクは実施することが可能である。一方、ゲイロードと大逆手ゲイロードは同一枠（同一番号）であり、同一技となり出現順に一技のみカウントされる。

● ゆ か

1) 採点の方向性

- 積極的に D スコアを高めた演技を評価する。
- 雄大なタンブリングと安定した着地の実施を評価する。
- 演技全体を通してリズムカルで美しい演技を評価する。

2) 難度認定の確認事項

1. 前転とび直接前方かかえ込み宙返り：D 難度（Ⅱ-10：モランディ）
2. 後ろとびひねり前方(伸身・屈身)2 回宙返り 3/2 ひねり：F 難度
 - * グループⅣを認定しない。ヒポリト（Ⅳ-18）に更にひねりを加えてもグループⅣの発展技として考えられないと判断し、後方 2 回宙返り 2 回ひねりと同一技とする。
 - 後方伸身 2 回宙返り 2 回ひねり：F 難度（Ⅲ-24）
 - 後方屈身 2 回宙返り 2 回ひねり：E 難度（Ⅲ-11）
 - 後方かかえ込み 2 回宙返り 2 回ひねり：E 難度（Ⅲ-05）
3. 後ろとびひねり前方かかえ込み2回宙返り1回ひねり：E 難度（Ⅳ-18）
 - * ヒポリトと同一枠（同一番号）とするが別の技として判定する。
4. ヒポリトの表記を屈身or伸身に変更する。
5. 後ろとびひねり前方（かかえ込み、屈身、伸身）2 回宙返りひねりで明確な前方宙返りが示されない場合グループⅣの技とは認定されず、グループⅢの後方（かかえ込み、屈身、伸身）2 回宙返り 1 回ひねりと判定する。
6. 連続された宙返り技の着地で瞬時のコントロールも示さないような実施は、組合せ加点の対象としない。
7. 両足旋回から続けられたロシアン転向技は、両足抜きの後の正面支持から転向度数を数える。また、両足旋回を挟まないでロシアン転向技を実施した場合、最初の正面支持から転向度数を数える。
8. ゆかにおいて、終末技はグループⅤの技として判定すると共にグループ（Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ）内 4 技の一つとしてもとらえられる。終末技を含めて同一グループの技が 5 技以上あった場合、終末技を最初に数え、最も低い難度の技を除外する。
9. グループⅡ、Ⅲ、Ⅳの技が終末技のみで実施された場合（その他では実施なし）、その技はグループⅤとみなされ、グループ（Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ）としての 0.5 を D スコアに加算しない。
10. 終末技で、既に行われた技を繰り返した場合、終末技の難度は不認定となる。
11. 後ろとびひねり前方伸身 2 回宙返りひねり：F 難度（Ⅳ-24：ペネフ）（東京）

3) 演技実施上の確認事項

1. アクロバット技の連続で安定した着地を示しても高さ（浮き）がない場合、実施減点となる。
2. アクロバット技のやや高さがない実施の減点（-0.1）。
3. かかえ込み宙返りにおいて不明瞭なかかえ込み姿勢は実施減点となる。
4. アクロバット技の連続でひねり不足が明らかな場合の減点（-0.3）。

5. 宙返り転技の高さ不足の減点（-0.1）。支持局面で、手の甲で転になる実施の減点（-0.3）。
6. 宙返り転技は、転の前に身体の伸ばしが要求される。体をまげたまま転になる捌きは小・中欠点である。また、宙返りの回転不足等で危険を感じるような実施は大欠点（-0.5）となる。
7. 宙返り転技で転がった後、スムーズに直立できないことに対する減点（-0.3、-0.5）。
8. トーマス等のひねりを伴う宙返り転技で、ひねり不足により半身の状態での転がった場合の減点（-1.0：半身での転、-0.3：ひねり不足、-0.1：技術欠点）。
9. ロシアン転向技で反り身の目立つ姿勢は減点（-0.1）。
10. 全ての力倒立技は、静止しなければならない。そのため P31 第 27 条 3. g) は削除となる。
11. 十字倒立への経過で、速いリズムで倒立に持ち込む捌きの減点（-0.1）。
12. タンブリング間の動き・コレオグラフの工夫は演技の持ち味となるが、無味乾燥とした動き、コーナーでの単純な場所取りや方向転換、アクロバット技の前の長すぎる停滞（2 秒以上）は減点となる。
13. コーナーへの単純なステップや移動は、0.1 の減点（良い動きで少なくとも 180°のターンが含まれなければならない）。
14. 転や正面支持臥になる技を、2 回を超えて実施した場合、3 回目から E 審判による減点となる（毎回-0.3）。同一技を 2 回実施した場合でも 2 種類実施の場合と同様に、3 回目から減点の対象となる。小さくとんで正面支持臥になる捌きや幅をとるための小さなとび前転もこの対象となる。
例) 1 本目アクロバット技～前とび正面支持臥、2 本目アクロバット技～前とび正面支持臥、3 本目トーマスを行った場合、E 審判からの減点と同時に、トーマスの難度が認められない。
15. 同一対角線の使用については、同じ対角線を連続して 3 回以上、何回連続で使用しても 0.3 の減点となる。その後、別の対角線で更に 3 回連続の使用があった場合、あらたに 0.3 の減点が発生する。
16. 同一対角線の使用については、アクロバットシリーズの間に力技や旋回技などを実施しても、対角線の変更をしなければカウントは継続される。
17. 後転倒立で両手はフロア内、両足がフロアの外へ降りてしまった場合のライン減点（-0.3）。

● あん馬

1) 採点の方向性

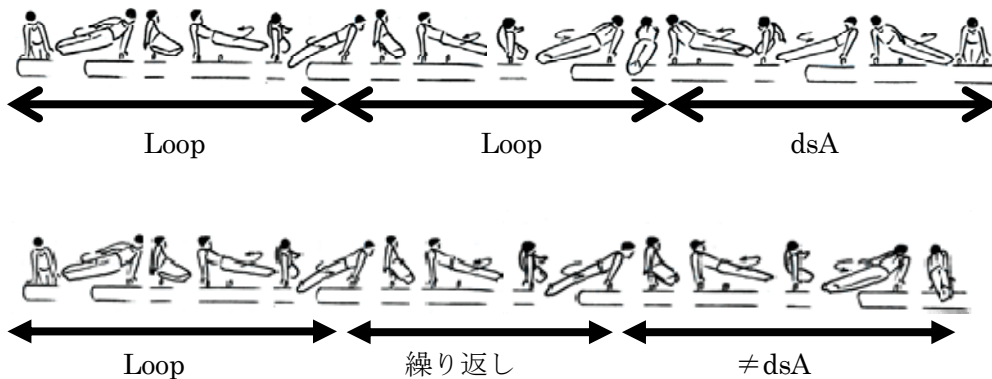
- 積極的に D スコアを高めた演技を評価する。
- 腰高で十分に体を伸ばしスピード感のある安定した旋回を評価する。
- 交差や片足振動技は腰の位置の高いものを評価する。

2) 難度認定上の確認事項

1. 他に記載されていない限り、すべての旋回技の開始と終了は正面支持である。下向き転向（フクガ）やショーンで背面支持から片足振動技に繋がった場合、難度不認定となる。
2. 一演技中、縦向きでの 3 部分移動は、前移動 1 回、後ろ移動 1 回のみ認定される。マジヤール移動（D）の後に縦向き前移動 3/3（馬端－把手－把手－馬端：C）を実施しても難度不認定となる。
3. ロシアン転向技は、把手上および馬背上において終末技を含めて最大 2 回まで実施することができる。この条項に関しては、終末技を一番目に数え、ベスト 9 に含まれないロシアン 180°

転向 (IV-55) も含め出現順にカウントされる。ロシアン転向技のカウントに、コンバイン、ウ・グォニアン、ロスが含まれない。

4. フロップやコンバインで落下した場合、落下までに成立した部分の難度を認定する。ただし、明確な正面支持を示した場合に限る。コンバインでは一把手上で手の握り換えが終了した時点正面支持とする。
5. 一把手上縦向き旋回連続+dsA はフロップ技となり D 難度で認定する (下図上段)。しかし、下段のような一把手上縦向き支持から 1/4 転向のみの場合は dsA とは判定しない。



6. ウ・グォニアンの途中で落下または停止した場合、難度は不認定となる。3/3 移動後に明確な正面支持が認められた後に落下した場合、難度は認定される。
7. ウ・グォニアンは、あん部馬背支持に達するまでに 360°の転向を完了し、残りの 360°の転向を馬端馬背支持に達するまでに完了しなければならない。3 部分移動が完了した時点で 360°を転向し、続けて馬端馬背支持で 360°の転向をするような捌きは 2 技と見なす。(ロス+ロシアン 360°転向)
8. ロシアン転向技の途中で落下した場合、落下までの転向度数分の難度を認定する。ただし、明確な正面支持が認められた部分までとなる。
9. **ロシアン転向下りで途中落下した場合、常に下記の通りに難度認定される。D 審判が終末技で落下したと判断した場合、ロシアン転向下りの難度とグループ V は認定されない。E 審判は通常の落下+実施減点を適用する。**

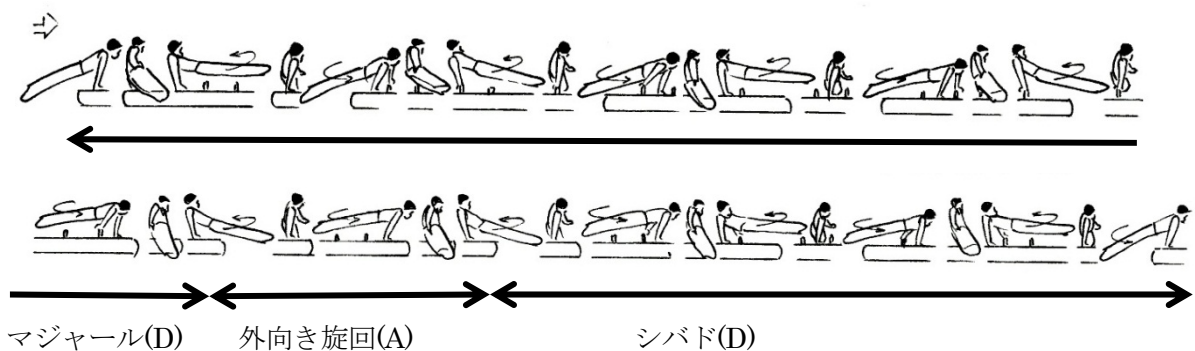
例) ロシアン1080° 転向下りを実施しようとした途中経過においてロシアン900° 転向を完了して落下した場合、C 難度 (グループ IV) を認定する。選手はロシアン転向下りの難度とグループ V を獲得できない。このような場合、選手は難度とグループ V を確保するため、ロシアン転向下り以外の終末技を実施することができる。
10. あん部馬背で実施されるロシアン転向技は下記のように難度認定される。
 - ・ あん部馬背ロシアン1080° 転向：E 難度 (IV-59)
 - ・ あん部馬背ロシアン720° or 900° 転向：C 難度 (IV-57と同枠)
 - ・ あん部馬背ロシアン360° or 540° 転向：B 難度 (IV-56と同枠)
 - ・ あん部馬背ロシアン180° or 270° 転向：A 難度 (IV-55と同枠)

* 同一枠となる技番号の変更
11. 縦向き前移動の終了局面は縦向き正面支持である。マジヤール移動の終末局面で横向き背面支持 (入力で横向き背面支持) になるような場合は縦向きの 3 部分移動と判定せず 2 部分 (B 難度) とする。
12. シバド移動からロシアン転向技を実施する際、縦向き正面支持を示す前に転向を開始した場合、シバド移動 (D 難度) は成立しロシアン転向の開始は横向き正面支持となる。

13. 終末技は旋回技から実施しなければならない。片足振動技や不十分な旋回技からの倒立は終末技として認定しない（情報 17 号）。
14. 倒立を経過する終末技で移動やひねりが含まれた場合、馬体を越えなくても技の成立した部分まで難度を認定する。

例) dsA 倒立 3 部分移動 1 回ひねり下り (E 難度) で、3 部分移動後 1 回ひねりの途中で中断した場合、dsA 倒立 3 部分移動 (D 難度) まで認定とする。

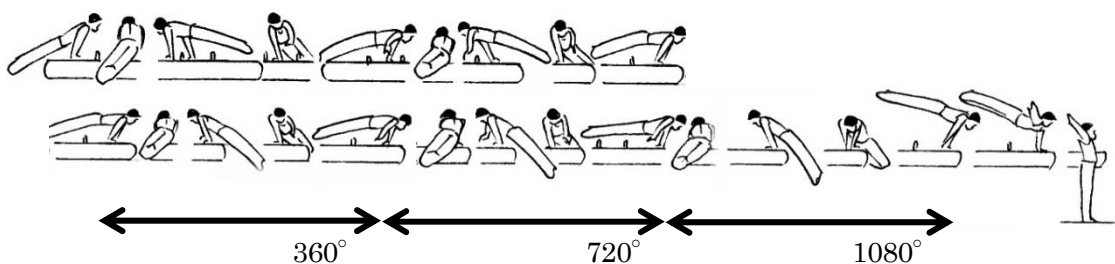
15. 横向き正面支持から 1/4 転向しながらの一把手上縦向き正面支持（一把手上へ入れ抜き）は、一把手上縦向き旋回 (B 難度) と判定する。
16. 馬端中向き縦向き正面支持から前移動 1/3～一把手上縦向き旋回をする場合、一把手上への移動後正面支持までを前移動 (A 難度) と認定し、正面支持から次の縦向き旋回を数える。
17. ~~マジヤール移動～馬端外向き旋回～シバド移動を実施する場合、マジヤール移動後の馬端外向き正面支持から外向き旋回を数える。~~



マジヤール～外向き旋回～シバド移動を実施する場合、特例として馬端外向き縦向き旋回は背面支持から開始し背面支持で A 難度を認定する。

※この馬端外向き旋回の A 難度の認定は、縦向き前移動 3/3 部分（マジヤール、III-45、46）とシバドの間に実施された場合に限る。上記以外の縦向き旋回（馬端外向き旋回や中向き旋回）、横向き旋回で A 難度を認定する場合は全て正面支持から数える。

18. 馬端外向き縦向き正面支持から開始されるロシアン転向下りは、転向した度数をすべて含めて数えるものとする。下図のようにウ・グォニアンから実施されたロシアン転向下りは、馬端外向き正面支持から開始となりロシアン 1080° が成立し D 難度が認定される。



19. 倒立を経過し振り下ろして再び旋回や交差技になる技は、倒立になる前の技のグループとして判定される。

例) 旋回倒立振り下ろして旋回：C 難度（グループ II）

背面とび横移動倒立振り下ろして旋回：D 難度（グループ III）

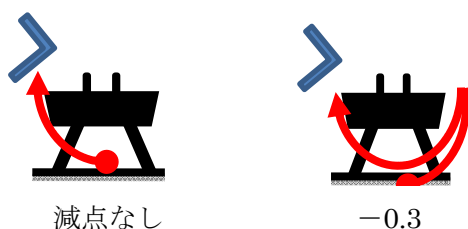
シュテクリ A 倒立振り下ろして旋回：D 難度（グループ IV）

20. 倒立位を経過する交差技や終末技において、倒立への上昇局面での停止や足先が下がった場合、難度は不認定となる。

21. 倒立を経過する交差技において、D 難度を得るためには 5 種類の技術がある。
 - ・ 正交差1/4ひねり一把手上倒立経過下ろして開脚支持 (I-04: リーニン)
 - ・ 後ろ振り1/4ひねり一把手上倒立経過下ろして開脚支持 (I-22)
 - ・ 正交差1/4ひねり一把手上倒立、把手上倒立ひねり下ろして開脚逆入れ支持 (I-34: ブライアン、ひねり後一把手上倒立から片腕支持で下ろし逆入れ支持)
 - ・ 逆交差1/4ひねり一把手上倒立、把手上倒立ひねり下ろして開脚逆入れ支持 (I-40: ひねり後一把手上倒立から片腕支持で下ろし逆入れ支持)
 - ・ 支持後ろ抜き倒立1回ひねり、下ろして旋回or開脚旋回or正交差 (I-46)
22. 一腕上上向き270°転向 (早い握り換えから) 横向き支持: B難度
 ※ 馬端横向き旋回から軸手を支持した際、縦向き支持になる捌き
23. 一腕上上向き270°転向 (早い握り換えから) 一把手上縦向き支持: C難度
24. 一腕上上向き全転向 (ショーン): D難度 (IV-10、難度、技番号変更)
25. 一腕上上向き全転向、直ちに馬背縦向き支持or一把手を越えた横向き支持: D難度 (IV-05と同一枠)
26. 一把手上縦向き支持からあん部馬背へ移動しながら旋回1回ひねり: E難度 (II-35と同一枠)
27. 下向き正転向移動 (片手把手、片手馬端~馬端馬背): C難度 (片手把手、片手馬端からのトンフェイ)
28. 馬端外向き支持から下向き逆移動(Back Stocli)で反対の馬端外向き支持: D難度 (マクニール)
29. 縦向きとび前移動3/3 (III-47: ドリッグス) は、明確なとびの後両手同時正面支持を示した場合E難度と判定し、それ以外はD難度 (III-46: マジャール移動) とする。
30. 両手を挟んだ馬背ロシアン 360° 転向 (ポメルを挟んだロシアン転向): C 難度
31. dsA (or 下向き逆移動) 倒立 3/3 移動 360° ひねり (開脚) 旋回: F 難度 (IV-72: プスナリ)

3) 演技実施上の確認事項

1. 交差技以外の片足振動技においても大きさのない実施は減点 (-0.1、-0.3)。
2. とび交差技についても、高さの減点は交差技と同様に扱う。両脚で馬体を挟んだり、臀部がついた場合は、器械上への落下とする。(情報 17 号)
3. 片足振動技で開始する際の余分な予備振動は-0.3 の減点となる。半振動は認められる。



4. 倒立を経過する交差技は振動で実施されるべきであり、腰をまげて倒立位になるような捌きは、腰のまがり (-0.3) および力の使用 (-0.3) と2つの項目で減点の対象となる。
5. 倒立位を経過する技で倒立への上昇局面で足先が下がった場合は、-0.5の減点となる。
6. 一把手上で倒立位を経過する交差技において倒立で歩いた場合、以下のように判定する。
 - ・ 片手が把手からおりて再び把手に戻った場合、D難度で判定し、E審判は0.3+他の実施減点 (倒立位でのバランス不良など) をする。
 - ・ 片手が把手からおりて再び把手に戻れなかった場合、D難度で判定し、E審判は0.50+他の実施減点 (倒立位でのバランス不良など) をする。

- ・ 両手が把手からおりた場合、難度不認定となり、E審判は0.5（演技停止）または1.0（落下した場合）+他の実施減点をする。
- 7. 旋回や開脚旋回の高さに欠ける減点については、E審判は身体が十分に伸びていない実施に対して演技全体の減点（-0.3、-0.5）として対応する（第33条）。一技における腰のまがりは技術欠点として減点される。
- 8. 縦向き移動技で移動した後の終末局面で向きが不正確な実施は減点の対象である。
- 9. 縦向き移動技の向きの逸脱や着手位置のずれは旋回（一移動）ごとに減点される。
- 10. フロップ技は一技ごとに減点される。
- 11. 旋回技において馬体に触れる（当たる）実施は毎回減点となる（-0.1、-0.3）

● つり輪

1) 採点の方向性

- 積極的にDスコアを高めた演技を評価する。
- 正確な姿勢と静止時間で力強さを感じる力静止技の実施を評価する。
- 終末技は、着地の準備局面を示し止まるものを評価する。

2) 難度認定の確認事項

1. 中水平支持は、輪の高さで身体を水平で一直線に保持しなければならない。肩の大半が輪の上端より上にあつた場合、水平支持と判定する。
2. アザリアンやヤン・ミンヨン（後方伸腕伸身逆上がり水平支持）は、伸身姿勢での後転が前提であり、腰のまがりは実施減点となる。明らかに反動を利用した場合、グループⅢの技となる。
3. ピネダ（正面水平懸垂経過十字懸垂）、バブサー（正面水平懸垂経過中水平支持）は伸腕が前提であり肘のまがりは実施減点となる。極端にまがる実施は難度を認定しない。また、正面水平懸垂（経過）は、正確な姿勢を表現し反動や振動を使わないで実施しなければならない。
4. ナカヤマについては、背面水平懸垂姿勢を経過し、ゆっくり捌かなければならない。明確に背面水平懸垂まで下ろさないものは単なる十字懸垂（B難度）と判定する。また、反動を使うような捌きはD難度として認定しない。
5. 脚前挙十字懸垂から肩を前に出して中水平支持は、一度腰を伸ばしてから中水平支持に捌くことが前提である。腰をまげたまま肩を前に出す捌きは実施減点となる。
6. 振動からの力静止技は、融合した動きで静止技に持ち込まなければならない。輪の高さで前方宙返り十字懸垂（ホンマ十字懸垂）やけ上がり十字懸垂は、肩が上がりすぎてから(45°<)終末姿勢に持ち込んだ場合は2つの技として判定する。
7. 後方伸身2回宙返り1回ひねり下りは、全経過で明確な伸身姿勢を示さなければならない。
8. グループⅢおよびⅣの技は直接4技まで連続することができる。5つ目以降はD審判によって難度が認定されない。グループⅢとⅣの技が連続していないとするためには、最低B難度以上の振動技が必要であるが、け上がり脚前挙支持（I-56）と後方け上がり（I-62）は「B難度以上の振動技」というこの条件から除外される。

例) 振り上がり開脚水平支持～十字懸垂～逆上がり～脚前挙支持～屈腕伸身力倒立

[C (Ⅲ) ~ B (Ⅳ) ~ A (Ⅳ) ~ A (Ⅳ) ~ B (Ⅳ)]

この場合、屈腕伸身力倒立がこの項に抵触し5つ目の連続と判定され難度が不認定。

9. IV-65: 水平にゆっくり下ろして背面水平懸垂経過引き上げ中水平支持（2秒）の同一枠に「中水平支持からゆっくり下ろして背面水平懸垂経過水平支持（2秒:バンゲルグダー）」: E 難度（情

報 17 号) を追加。

10. 懸垂から伸腕伸身で引き上げて中水平支持(IV-53) : E 難度 (バランディン 1)
11. 懸垂から伸腕伸身で引き上げて十字倒立(IV-59) : E 難度 (バランディン 2)
12. 前振り上がり上向き中水平支持(III-6) : F 難度 (ロドリゲス)
13. 正面水平懸垂経過十字倒立 (2秒) : C 難度 (十字倒立のみ認定)
14. 十字倒立からゆっくり下ろして逆懸垂経過後転十字懸垂(2秒) (IV-94) : D 難度 (ボロビオフ、振動を用いずゆっくり)
15. ゆっくりと後方伸腕伸身逆上がり水平支持 (2秒) (IV-47) : E 難度 (ヤン・ミンヨン)
16. け上がり上向き中水平支持 : F 難度 (III-54)
17. p 93、IV-17 (ロドリゲス)、IV-23 (ロドリゲス) を削除、それぞれ、独立した難度で判定する。
18. 背面水平懸垂経過伸腕伸身十字倒立 : F 難度 (IV-60 : カルモナ) (ロッテルダム)
19. け上がり脚上挙十字懸垂 : D 難度 (III-70 : モリナリ) (ロッテルダム)
20. ゆっくりと後方伸腕伸身逆上がり脚前挙支持 : B 難度 (IV-38) (ロッテルダム)
21. 屈身ヤマワキ (ジョナサン) や伸身ヤマワキで支持局面がみられた場合、(伸身) ホンマと支持後ろ振り前にまわりながら懸垂に分割される。ただしヤマワキ (かかえ込み) で支持が見えた場合とジョナサンで屈腕支持になった場合は、難度を認定しない。
22. 前方屈身または伸身宙返り 5/2 ひねり下り : D 難度 (V) (東京)
23. 後方伸身宙返り 3/2 ひねり下り : C 難度 (V-27 : 2 回ひねりと同一枠)

3) 演技実施上の確認事項

1. 輪 (ケーブル) の揺れやゆがみはより厳密に採点する。
2. 十字倒立で、頭頂部が輪よりも高いような実施の減点 (−0.5)。
3. 十字倒立で反った捌きに対する減点 (−0.1)。
4. 中水平支持や開脚水平支持で、肩が静止していても足先が揺れていたり、全体的にジワジワと動いているような実施では静止は認められず、全く静止していない減点 (−0.5) に抵触する。
5. 屈腕伸身力倒立で振動を使った場合の減点 (−0.1、−0.3)。
6. 伸腕屈身力倒立で肘がまがった場合、腕のまがりの減点、(−0.1、−0.3) とロープに触れる減点 (−0.3) となる。
7. ヤマワキやジョナサンで回転速度が遅い、または大きさがいい場合の減点 (−0.1、−0.3)。
8. ヤマワキやジョナサンの回転途中で支持がみられた場合 (止まりかけて前ロールをするような捌き) の減点 (−0.5)。
9. 伸身ヤマワキで腰角度が 45°までは伸身姿勢で判定し姿勢不良の減点となる (−0.1)。

● 跳 馬

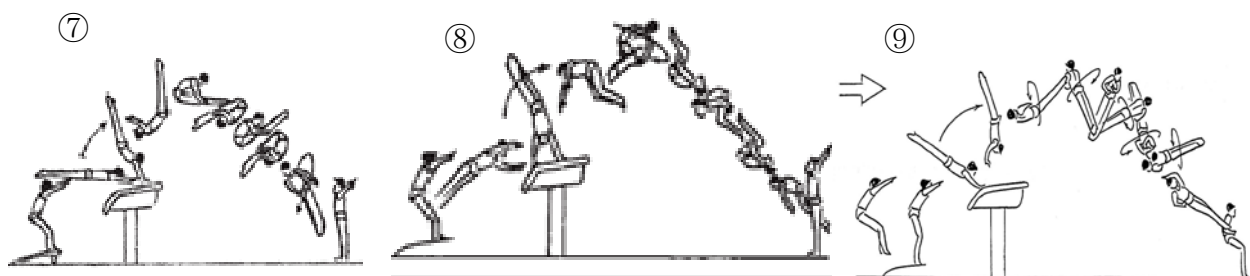
1) 採点の方向性

- 高い価値点の跳越技を評価する。
- 雄大な跳越で、着地の準備局面を示し止まるものを評価する。

2) 演技実施上の確認事項

1. 高さ不足 (上昇局面のみられない実施) は以下の基準とする。
 - ① 減点なし=感動する程の高さ
 - ② 小欠点=浮いたと感じる程度

- ③ 中欠点=浮きがみられない
 - ④ 大欠点=低いと感じる
2. ロペスやローチェであっても準備局面がみられない着地は減点となる（-0.1、-0.3）。
 3. 着地位置が低い実施は減点の対象である。
 4. 着地一步の踏み出しで、肩幅以上は中欠点である。
 5. 着地が止まっても脚が開いたままであったり、ずれている場合は減点の対象である。
 6. 軸ぶれやひねり不足による横方向への一步は、さらなる減点の可能性はある。
 7. 前転とび前方屈身 2 回宙返りひねり（屈身ドラグレスク）：7.2（Ⅲ-41）
 8. 側転とび 1/4 ひねり後方かかえ込み 2 回宙返り 1 回ひねり：7.2（Ⅳ-38）（リ・セグアン）
 9. 前転とび前方伸身宙返り 3 回ひねり：7.4（Ⅲ-48：ヤン・ハクソン）（東京）



● 平行棒

1) 採点の方向性

- 積極的に D スコアを高めた演技を評価する。
- 手の握りかえや肩のゆらしがない安定感を感じる演技を評価する。
- 空中局面を伴う技では、雄大で支持の前に体をよく伸ばすものを評価する。
- 終末技は、雄大で着地の準備局面を示し止まるものを評価する。

2) 難度認定の確認事項

1. 屈身バーレは、最初の後方宙返りから明確な屈身姿勢を示さなければならない。懸垂から宙返りになる際に膝のまがるものや屈身の不明確な実施（屈身になるのが遅い）は、かかえ込みと判定する。
2. 棒下宙返りひねり倒立において単棒上で明らかな停止をするような実施は、難度不認定とする。
3. 棒下宙返りひねり倒立で倒立の角度が低い実施（45°未満）をした場合、明らかな過失として難度不認定とし、棒下振り出しひねり（C 難度）としては判定しない。棒下振り出しひねり支持を実施する場合は、意図を明確に表現しなければならない。
4. 棒下宙返り倒立で肘がまがっても上昇運動に停滞がなければ難度を認定する。しかし、上昇中に停滞する実施や肩が一度下がるような実施は難度不認定となる。
5. シャルロ（棒下宙返り単棒縦向き倒立）：E 難度（1 秒以上の静止）
 - * 静止が 1 秒未満でも、E 難度と判定する（静止時間不足：-0.3）。
 - 瞬時単棒縦向き倒立では難度不認定（-0.5）。
6. 開脚抜き倒立技（チップルト等）で脚がバーにのった場合、難度不認定となる（器械上への落下）。また、開脚支持で明らかに停止する実施も難度不認定となる。
7. 開脚抜き倒立技（チップルト等）で上昇時に足先が一端下がり再び上げた場合、難度不認定と

なる。

8. 懸垂前振り上がり開脚抜き、伸身かつ水平位で懸垂：E難度（Ⅲ-05：バブサー）
 - * この技の後に連続された技は独立した難度を有する。後方車輪やモイであればE+C、ベールであればE+D等
9. 後方背面車輪（Ⅲ-16：ウエルス）と後方車輪ひねり（Ⅲ-27）を削除し、後方車輪（Ⅲ-21）と同一枠とする。
10. 棒下宙返り背面倒立経過とび倒立（Ⅳ-16：クシェラ）を削除し棒下宙返り倒立（Ⅳ-10）と同一枠とする。
11. 倒立から伸膝で振り下ろし懸垂前振り上がり開脚抜き腕支持：C 難度（Ⅲ）（ロッテルダム）
 - * バブサーと同枠から外し、モイの同類技と捉える。
 - * 採点規則上の難度枠を与えない（次期採点規則まで）。
12. 倒立から伸膝で振り下ろし懸垂前振り上がり開脚抜き屈腕支持：C 難度（Ⅲ）（東京）
 - * 世界選手権報告ではバブサー屈腕支持と表記。
 - * モイの同類技（屈身モイ開脚抜き屈腕支持）と捉え、上記 11 と同一枠技とする。
 - * 採点規則上の難度枠を与えない（次期採点規則まで）。
13. 後方車輪単棒縦向き倒立：D 難度（1 秒以上の静止、Ⅲ-22：ピアスキー）（ロッテルダム）
 - * 静止が1秒未満でも、D 難度と判定する（静止時間不足：-0.3）。
 - 瞬時単棒縦向き倒立では難度不認定（-0.5）。
14. 懸垂前振り後方宙返りひねり（屈腕 or 伸腕）支持：E 難度（Ⅲ-47：トレス）（ロッテルダム）
15. 前方開脚 5/4 宙返り懸垂：E 難度（Ⅰ-89：ササキ）（東京）
 - * 採点規則 44 条 3.b)宙返りの規制の対象となる。一演技中に同一形態の技は出現順に一技のみ認定される（前方開脚 5/4 宙返りは一回のみ）。支持、腕支持、懸垂のすべてが対象である。
16. 屈身モイ（開脚抜き）ひねり腕支持：B 難度（Ⅲ-08）（東京）
 - * 世界選手権報告では倒立から伸膝で振り下ろし懸垂前振り上がり（開脚抜き）ひねり腕支持と表記。
17. 前振り上がり後方かかえ込み 5/4 宙返りひねり腕支持：D 難度（Ⅱ-22：ダルトン）（東京）
18. 前振り 3/4 ひねりとび（軸手と反対側の）単棒横向き倒立：D 難度（Ⅰ-04：ディミック）（東京）
19. 前振り片腕支持 5/4 ひねり単棒倒立経過軸手を換えて片腕支持 5/4 ひねり支持：F 難度（Ⅰ）
 - * 単棒上で瞬時の停滞がない場合に限る（どんな停滞も 2 技に分割する）。
20. 前方屈身 2 回宙返り下り：F 難度（Ⅴ-06：ベルヤフスキー）
21. 屈身ドミトリエンコ：F 難度（Ⅱ-24：リー・シャオペン、発表者名を追加）
22. 屈身モリスエ：E 難度（Ⅰ-41：ファン・リーピン、発表者名を追加）

3) 演技実施上の確認事項

1. モリスエやベールの高さ不足の減点（-0.1、-0.3）。
2. モリスエやベールは浮きの表現とともに、腕支持になる前に身体や膝をよく伸ばさなければならない。身体の伸ばしが不十分なものや、膝を曲げたまま腕支持になるものは実施減点の対象となる。回転の途中でぶつかるように腕支持になる減点（-0.5）。宙返りでかかえ込んだまま腕支持になった場合の減点（-0.3）。
3. モリスエやベールでバーを持った瞬間の姿勢不良の減点（-0.1、-0.3）。
4. ベール、モイ、車輪系の技で足先がマットに触れた減点（-0.1、-0.3）。

5. ベーレや宙返り系の技の終末局面において、バーを正確に握らない、または遅い握り、上腕部のみで支持しながら前振りになるような捌きに対する減点（-0.3）。
6. 棒下宙返り倒立系の技は伸腕での実施が前提である。肘がわずかにゆるむものは減点となる。肘が深くまがった場合の減点（-0.5）。肘がまがった場合の減点（-0.1、-0.3）。
7. 振動から倒立位を経過する技は、15°未満の角度逸脱であっても減点（-0.1）となる。
8. 静止技として難度が認定されるためには2秒保持しなくてはならない。脚前拳支持で2秒静止がない場合の減点（-0.3）。
9. 単棒横向き前方浮腰上がり脚前拳支持経過横向き倒立で、足先がバーに触れた場合の減点（-0.1、-0.3）。
10. チップルトの実施で脚がバーにのった場合、器械上への落下となり減点（-1.0）。
11. 終末技で着地を止めても着地前に身体を伸ばす局面がみられない減点（-0.1）。
12. 支持から腕支持前方ローリングをした場合の減点（-0.3）。
13. 50秒アップは、団体総合、個人総合でも1選手につき50秒が与えられる。バーの調整やマグネシウムをぬる時間も含まれ、オーバーした場合は決定点から0.30の減点となる。計時審判のコールはアップ開始の「スタート」、「40秒」、「50秒（終了）」とする。50秒までにアップを終了し器具から離れなければならない。

● 鉄 棒

1) 採点の方向性

- 積極的にDスコアを高めた演技を評価する。
- ひねり系の技は高い位置でひねりを完了する捌きを評価する。
- 手放し技は、雄大で安定感のある実施を評価する。
- 終末技は、雄大で着地の準備局面を示し止まるものを評価する。

2) 難度認定上の確認事項

1. 大逆手エンドーを行う際の大逆手振り上がりは難度を認定しない。
2. 手放し技の認定は明確な懸垂姿勢を示した場合に限られる。懸垂直後の前(後ろ)振りで落下した場合、不認定となる。
3. 屈身回転やとび車輪でひねりを伴う技において、水平より高い位置で技を完了しない捌きは難度不認定になる。
4. 屈身回転やひねりを伴う技の途中での停滞、とびひねり技でとびが見られない握り換えは難度を分割する。
5. ひねりを伴う技は握り方が違う同じ技（例：リバルコと後方とび車輪 3/2 ひねり片大逆手）を行うことはできない。
6. ヤマワキの実施において明らかに下向き転向でとび越した場合、ボローニン（B難度）と判定する。
7. 肩を反転位した状態での逆手背面車輪は大逆手車輪（B難度）と判定する。
8. 逆手背面車輪（C難度）は倒立から倒立の360度以上を満たさなければ認定されない。
9. 伸身で行う技は全経過伸身姿勢を示さなければならず、途中で屈身やかかえ込み姿勢がみられた場合、低い難度で判定する
10. 片手懸垂になる技はバーの下を最大2回まで通過することが認められる。
11. アドラーが倒立位（C難度）と判定された場合、その後に実施された大逆手懸垂後ろ振りが

りとび逆手持ち換え倒立は、倒立位から倒立位まで 360° を満たしたとして大逆手車輪 (B 難度) と認定する。

12. 後方宙返り下り : A 難度 (V-25)
13. 後方伸身 2 回宙返り 2 回ひねり下りにおいて、後半に膝をまげるような実施は、かかえ込みと判定し D 難度とする。
14. 開脚モズニク : D 難度 (II-17)
 - * 伸身モズニクと開脚モズニクは、同一枠 (同一番号) とするが別の技として判定する。また、モズニク (伸身または開脚) は懸垂後に後ろ振り倒立または手放し技へ連続出来なかった場合や腕を交差しただけの実施はトカチェフ (伸身または開脚) と判定する。
15. 屈身ピアッティひねり懸垂、後ろ振り上がり倒立 : D 難度 (II-34)
16. 伸身ピアッティひねり懸垂、後ろ振り上がり倒立 : E 難度 (II-29)
17. トカチェフひねり両大逆手懸垂、後ろ振り上がり倒立 : E 難度 (II-23) (ロッテルダム)
18. かかえ込みゲイロード II : D 難度 (II-76)
19. ヤマワキひねり片大逆手懸垂～後ろ振り上がり倒立 : E 難度 (II-47 : ムーノズ) (東京)
20. 大逆手後ろ振りゲイロード (ゲイロードと同一枠) : D 難度 (II-52)
21. 前方浮腰回転振り出しとび倒立 1 回ひねり大逆手懸垂は、前方浮腰回転振り出しとび片手逆手倒立 (D : IV-10) と 1 回ひねり大逆手懸垂 (C : I-15) の 2 技に判定する。(東京)

3) 演技実施上の確認事項

1. 屈身回転ひねり系の技において、ひねりの前に屈身倒立で停滞するような実施は減点であり、そのうえ分割した難度認定の可能性がある。屈身回転倒立の上昇中にひねりが始まらない場合、減点となる。片大逆手になる技で高い位置でバーを握ってもひねりが完了していない実施は減点となる。
2. 手放し技は、バーを握る前に身体をよく伸ばさなければならない。身体の伸ばしが不十分な捌きや、膝のまがった実施、身体が歪んだまま懸垂になるものは減点となる。
3. 車輪での単純な横への手のずらし (片手も含め) は減点 (-0.1)。
4. 終末技や手放し技の前の車輪での膝まがりは減点となる。
5. 終末技や手放し技の前の車輪の倒立位からの外れに対する減点はない。
6. ひねりを伴う技はひねり終わってバーを握った時点の角度で判断をする。
7. 後方とび車輪 1 回ひねりで片手ずつ握るような実施は減点 (-0.1、-0.3)。
8. アドラーの難度認定と角度の減点について

	≤15°	16-45°	>45°
D 審判	C	B	難度不認定
E 審判	減点なし	減点なし	-0.50

9. アドラー 1 回ひねり (片逆手倒立 or 逆手倒立)

	≤15°	16-45°	46-90°	>90°
D 審判	D or E	D or E	B	難度不認定
E 審判	減点なし	-0.10~0.30	減点なし	-0.50

- * アドラーひねりとアドラー 1 回ひねりで逆方向に戻った場合、倒立位を経過 (難度は認定) しても技術欠点 (-0.5)。

6 終わりに

審判委員会
男子体操競技審判部
部長 後藤 洋一

2011年は、日本にとって忘れることの出来ない1年であったかと思います。3月11日の東日本大震災により予定されていたいくつかの大会が中止となってしまいました。選手にとっては日ごろの努力の成果を発表する場が無くなってしまうため、苦渋の判断であったかと思われます。そして、震災の被害の大きかった岩手県で開催されたインターハイでは恙なく競技が進行し改めて体操競技に関わることが出来る喜びを皆が実感できました。そして、世界選手権東京大会も開催が危ぶまれ5月のFIG評議会で東京の安全が世界各国に理解され開催の決定となりました。

2011世界選手権東京大会では、内村航平選手が史上初の個人総合三連覇を達成し種目別においてもゆかで金メダル、鉄棒で銅メダルを獲得するだけでなく、山室光史選手が個人総合とつり輪で3位、沖口誠選手が跳馬3位と複数選手がメダルを獲得したことは昨年度の課題を一つクリアできました。しかし、団体総合では目標とした優勝には届きませんでした。優勝を狙うチームとしてアシデントやケガを乗り越える強さがこれからの課題かもしれません。

世界選手権東京大会を目の当たりにしていろいろなことを感じ取られたと思います。世界中にはいろいろなレベルの選手がいること、日本が求めている『美しい体操』が評価を受けたことと大過失をしてしまうと勝てないこと、同じ大会でありながら予選と決勝でEスコアの基準が変わってしまうこと、それぞれが日本体操界に関わる皆さんにとって財産となることでしょう。

また、今年度はマナーアップという観点からローテーション時の挨拶は、主任審判(D1)の前に整列をすることをお願いしました。五輪や世界選手権大会におけるポディウム上と同じと考えたからです。多くの監督・選手にご理解をいただいたこと、演技以外の行動や振る舞いまで気を配っていただいたことに感謝いたします。

2012年に向けて、審判の皆さんには採点技術の更なる研鑽をお願いします。そして、オリンピック大会が終わりますと『2013年版採点規則』の発行の準備が始まります。伝達研修会(1種審判員義務研修会)は、2012年度事業となり1種審判員の参加が義務付けられます。第13期大陸間審判コースは、2012年12月に計画されており、FIG/MTC(国際体操連盟男子技術委員会)の動向を踏まえ情報の伝達を検討しています。採点規則の改訂は、国内のあらゆる場面に影響を与えます。誤った情報等に左右されることのないようご注意ください。

オリンピック・ロンドン大会では、選手の練習成果が十分に発揮され当初の目標が達成されますことを祈念して、情報19号(訂正版)のまとめとします。

おわり